

漢法苞徳塾資料	No. 245
区分	巻頭言
タイトル	バカの効用
著者	八木素萌
作成日	

日本の漢法医学は、明治の初期に法制的に抑圧された。然し滅びなかった。そして昭和の初期に奇跡的な復活を行なった。食うや食わずで、頑固に護り抜いてくれた極く少数の「バカ」が居てくれたお蔭である。これこそが「バカ」の効用だ！しかし、頑固に護り抜いた人々のお蔭だけでは、復活はなかったのである。復活させた人達は、80年もの間世間から隠されていたものを、掘り起こす仕事をしなければならなかったのである。80年余の抑圧=80年間も世間の目から切り離されていた事は、やはり大きな傷を残していた。そのキズを引きずっての復活とならざるを得なかったのである。今、その引きずった部分のマイナス面を改める必要が意識されている時代になっている。「ブームに浮かれている」人達には、頑強に守り抜いた人々への畏敬と感謝の念はないだろう、復活に生命をすり減らした人々への畏敬と感謝の念はないであろう。「浮かれて」いるから「引きずらざるを得なかったキズ」などという意識も、それへの痛みの思いも無いであろう。

中国の歴代の正史書には、「医」は「方技」の項に収載されてきたが、医学は「理」と「法」と「方」と「技」の世界であり、「ワザ」と「工夫」が、「伝承」のうえに築かれて、さらに承継がれざるを得ない世界であるからであろう。このような「方技」の世界では、その頂点は遂には「至芸の世界」であり、「ワザ」はただひたすらに磨きに磨いて行くしかないのである。「技」の持っている「芸」的な部分・分野は「科学の対象ではあり得ない」分野・部分である。「技」を「芸」としてひたすら磨き上げようと努め続けて行こうと言うのも、世俗的には「バカ」に見えよう。だが、「医」学の中にある「技芸」の部分・分野を軽んじては、靈妙極まり無い「いのち」と向かい合うことは真には出来るものではあるまい。血も泣も忘れた「平均」主義、「数値」主義は、「医の心」とは実は無縁なのである。

「バカ」になろうではないか！！